

明治31年の大洪水の思い出 ... 「誰も物を言う人はいなかった」

ここでは、「池田町開拓夜話」から、明治31年(1898)の大洪水の思い出を紹介しつづけます。(一部省略)

南部小三郎さんの話

明治三十一年九月六日、七日頃利別川が大氾濫した。川沿いに居た自分達八戸は家財道具を天井につるして、八線の高台地に腰まで水につかり手を取り合って避難した。

高台にやっとたどり着いて後を見ると、自分達の小屋八戸は皆流され、柱が何本か見えただけだった。この三十一年の大洪水で小屋の跡に残っていたのは、鉄びんのふた一つだった。誰も物を言う人はいなかった。

林松太郎さんの話

明治三十一年秋の大洪水で小屋は流され、二晩も田中と一緒に薪の間に野宿した。

この水害の時、八木が丸木船で助けに出た。水は七、八尺位(約2~2.5m)あり、水が屋根までつくと、家がポコンと浮かんで流れていった。

新津とよじさんの話

十勝川の氾濫でそこら一面は泥の海となって家も畑もあったものではありません。命からがら避難するのが精一杯で、家族を呼び合う声が地獄へ落ちていくような痛々しいものでした。

となりの斉藤さんは四斗樽(およそ72リットルの樽)を船の代わりにして命からがらフンペン山へ辿り着いたと、後で聞きましたが、あの恐ろしさは生涯忘れることはできません。

「誰も物を言う人はいなかった」

「川合開拓七人会」の思い出から
入植して数年後、何とか食糧の蓄えも出来て、販売作物を作り始めた時、天は容赦なく大きな試練を下した。

明治三十一年九月の大洪水である。十勝川の東西六キロから八キロにおよぶ流域の平野部を一本の大河と化し、泡立つ濁流が渦を巻いて流れる様は物凄く、入植者達は家も家財も捨てて丸木船で高台地区へ避難した。まして濁流の中に首だけ出して流れ去る馬を助ける術は全く無かった。

この時、平井春吉氏(川合開拓七人会の一人)の家も流失し、また神谷常吉氏(川合開拓七人会の喜作氏の長男)は大木にくくりつけた丸木船の中で、飲まず食わずで二昼夜を過ごしたという。

水害後流失をまぬがれた家とて泥に埋まり、収穫の秋を目前にした作物もまた流失して見る影もなく、鋤を手にする元気もなく、ただ茫然として途方にくれるのみであった。

政府では罹災者一戸当たり五十円の現金と、救助米として南京米の貸付けをしてくれたが、この洪水を契機に入植者の中には危険な川の流域を離れ、高台地や他の土地に移動する者も多くなった。

(『川合開拓七人会』とは、川合地区〔池田町〕で開拓を続けた人たち7人が、昭和26年〔1951〕に結成したもの)
(『川合のあゆみ(1978)』より)

上徳善七さんの話

明治三十一年の大洪水の時は大金を出してようやく手に入れた一頭の馬を守るため、流れそうな家の屋根に上り馬のたづなを引いて助けたものでした。(左ページ絵)

アイヌの人たちによる救助 ... 明治31年の大洪水の記録

明治31年(1898)の大洪水の時には、こんな記録も残っています。(やさしいことば・文に直してあります)

「札内川にかけられていた栗山橋(今の札内橋)は、7日正午12時ころ、流木のために破壊され、人馬の交通がとだえた。(栗山橋 p182)

この橋から下流、十勝川までの間では、札内川の水が十勝川のはげしい流れにさえぎられ逆流したために、安木マツチ製軸所と付近の人家が水につかった。逃げおくれで屋

上で助けを求める人たちがいた。

大変危険な状態にあるのを見て、高地に住んでいたアントマツ、ツウプトアイノ、アシノマツ、カイキマツ、シマキアイノ、チャマート、イタコランら男女7人のアイヌの人たちが丸木舟2艘を出し、激流の中をこぎわたり、安木マツチ製軸所から22人、その隣の家から2人、増田伊吉家7人を救助した」

「帯広市史 平成15年編」より

3 罹災(りさい): 地震・台風・洪水・津波・噴火・火災などといった災害にあうこと。
4 円(えん): 明治31年(1898)の手紙が2銭=0.02円、明治30年(1897)の東京で米10kgが1円12銭=1.12円、映画が20銭=0.2円。(『値段の明治大正昭和風俗史 上下』より)

5 南京米(なんきんまい): インド・タイ・インドシナ(今のベトナム・ラオス・カンボジアなど)・中国などから輸入した米のことを一般にこういった。